

小田原史談

第15号
発行所 小田原談史会
小田原市幸一丁目
小田原土佐郷

真説曾我兄弟(二)

中野敬次郎

三、鎌倉武士を感激させた仇討

曾我兄弟の仇討は、荒木又右衛門の伊賀越の仇討、赤穂浪士の討入りと合せて、日本三大仇討と言われておって、室町時代に早くも「曾我物語」という有名な伝記物語が出て広く愛読せられ、江戸時代になると特に演劇で人気を博し、戯曲脚本だけでも六百余種に上っている程であるから、いつの時代でも誰知らぬものもない事件であるが、事の顛末を簡単に述べると、兄弟の祖父伊東次郎祐親と、祐親の徒弟の工藤左衛門尉祐経との、一族の所領争いから端を発しているのである。

伊豆国の豪族である工藤氏は、摂岡家藤原氏の南家武智麻呂の九世の裔の為憲が始めて武臣の列に入って木工助に任ぜられたので工藤氏を名乗ったところから家名が起きているのであるが、この為憲より五代の孫の維職のときに伊豆の押領使となって東国に下って伊東の郷に住んだので、一族また伊東氏をも称した。また維職の子の維経は同國狩野の郷に住んで狩野氏を称したから工藤・伊東・狩野の三氏は深い血縁でつながった同族であった。ところが、平安時代の末この工藤・伊東の二氏の間に領土争いが生じたのである。工藤祐経の父祐経が伊東・宇佐美・久須美の三庄を領し、伊東祐親が河津の庄を有していたところ、祐経が死んでその子祐経が幼いのに乗じて祐親が悪心を起し、後に自分の娘を祐経に娶合せて京都に上洛せしめ平家に仕えさせておきその留守中に工藤家の三庄全土を奪ってしまった。祐経は父祖伝来の領土を奪われたことを知って、伊豆に帰った後その取戻しを企てたが皆失敗し、あまつさえ妻も奪い返されて他に嫁せられてしまったので、大いに憤って祐親を恨み、安元二年(一一七六)十月十日赤沢山(伊東市の南方)の奥野の狩のあと、祐親の嫡男河津三郎祐泰の歸途を待伏して郎党をして射殺せしめたのである。

その時、遺児の兄の一万は五才で、弟の箱王は三才であったが、母は二子をつれて河津の庄から相模國曾我の郷の領主曾我太郎祐信のもとに再嫁したので、兄弟も養父の姓曾我を継いで、元服の後兄は十郎祐成、弟は五郎時致と名乗った。祖父伊東入道祐親は平家に味方して終始頼朝に対抗し、治承四年(一一八〇)の石橋山合戦の後に頼朝軍に攻められて敗れて自刃し果てたので一家沈んだが、兄弟は困苦窮乏の生活の中にあつて、父の仇を報いんと決意し、あらゆる困難な事情と闘いながら、十八年間の苦心の結果、富士の巻符の際に見事に父の仇工藤祐経を討ち取って積年の念願を達するのである。兄十郎は二十二才、弟五郎は二十才であった。

さて、建久四年(一一九三)五月二十八日の真夜中、仇討の本懐を遂げて後の乱斗の中に、兄の十郎祐成は伊豆國の住人仁田四郎忠常と渡り合つて斬られて生命を失い、弟の五郎時致は頼朝の小舎人童で強力者の御所の五郎丸という者に背後から組み付かれて遂に捕えられた。明けて二十九日には五郎が頼朝の面前に引き出されり尋問されたが、「吾妻鏡」によると、五郎が忿怒して、祖父伊東入道祐親は誅せられ、実父は非業の最後を遂げて子孫沈淪に及んだ憐憫と、父の仇を報ゆるために困窮の中に積年の辛苦をなめた有様を吐露した場面が描かれており、五郎の述懐には居並ぶ豪雄の鎌倉武士も皆感嘆したというので「聞夕者嗚舌ゼザル莫シ」と記している。

頼朝も兄弟の孝心と行動に深く心をうたれ、五郎の生命を宥そうとしたが、これは仇工藤祐経の妻と子息の犬房丸とが哀訴泣愁するによつて、救命を実現するに至らず、止むなく鎮西中太という者をして梟首せしめたのであった。

しかし、「吾妻鏡」の五月三十日の条を見ると、頼朝は、曾我兄弟が母に送った最後の手紙を取り寄せて読み、その中に盛られた仇討の苦心と心情に心を打たれて愛嘆し、その書状を永く將軍の手文庫に納めて保存したことが記されていて、「將軍御感涙ヲ拭フテコレヲ覽ル」と述べている。

この仇討事件に微妙な立場にあつた継父の曾我太郎祐信の様子を見ると、富士の巻符に頼朝に従つて参加して現地に來ていたのである。そして五月十六日から起きた巻符の初日の射手として活躍して面目を施しているが、二人の息子がこの地で仇討をするなどということは、あらかじめ何も知っていなかつたし、予想もしていなかつた。それ故、二十八日の仇討の騒動が起きたときには祐信は、流石に驚愕した。そして一応嫌疑がかけられ、すっかりおびえ切つてしたが、取調べを受けた結果、兄弟の行動と何等關係のないことが証明され有されたが、それのみにとどまらず、六月七日頼朝が鎌倉に帰ることになった時に、お供をしていた祐信に途中から休暇を賜い、あまつさえ、曾我の庄の年貢を免除して、祐成・時致兄弟の役後を篤く弔うようにとの有難い仰せを受けたのである。ここでも「吾妻鏡」は「是レ偏ニ彼等勇取ノ意ナキヲ感ゼラレ給フニ依テ也」と訳しておつて、このような特別の恩典に浴し、養父としても面目を挙げることになったのは、頼朝が兄弟の勇強と孝心に感激したからの処置であつた。將軍家の取扱いがかくの如きであるから、これより鎌倉武士は、皆この仇討を武士道の華として称揚するに至つたので、曾我兄弟という名は小説・演劇・謡曲その他いろいろなものに取りあげられて有名となり人気を博するに至つた。(続く)

郷土の学者

中垣謙斎を偲ぶ(三)

蓑田長平

大久保藩の叛旗と頭首の活躍

大久保藩がいよいよ佐幕派として旗幟を鮮明にしたのは遊撃隊等が箱根関所へ襲撃して来たときからである。即ち五月二十日の林昌之助以下遊撃隊脱走の一団大卒箱根関門へ襲来した。藩兵これと戦い勝敗未だ決せざるに翌二十一日に和議を結び、これらの叛軍と共に同じ所在の官軍を襲撃し互相軍監中井範五郎外七名を殺害し、同じく軍監三雲為一郎は小田原にあって変を聞き、漁舟に乗じ蘆沢に上陸して江戸に逃れた。同二十二日土州藩士吉井顯蔵箱根より逃れて小田原上方見付にいたり番所守土山田童兵衛・小泉彦蔵が斬つて小田原にはもはや官軍の隻影を留めなかった。

遊撃隊叛徒らは小田原に集合し首領株の人見勝太郎・伊庭八郎氏は小田原城内にて藩の家老渡辺了叟等と軍

事を議した。策戦として小田原城に立籠り、徳川の海軍奉行榎本武揚の來援と沼津・荻原山中藩の応援を得また義兵を募ることにして戦備を進めた。

このとき、中垣謙斎は江戸出府中であつたので、交を聞いて五月二十三日急遽早駕籠にて帰城した。

秀実直ちに城内に入り重臣に会いその方針の誤れるを極論し、深更に到るも決しなかつた。遂に君公の出座となり、極諫してもしわが説聴許なければ臣が首をはねてのちに佐幕の兵を挙ぐべく、然しながら臣を殺害せば直ちに天兵來りて君家は断絶すべしと瞑目勵色して動かなかった。

これについて豊原資清氏の「小田原藩情概略」にはもっと詳しく書かれている

「我藩遊撃隊と提携するの報江戸藩邸に到る。時に大目付中垣守宮秀実藩邸に在り、報を得て大に驚き、二十三日藩に帰り公に謁して時勢の変を説き大義名分を論じ、遊撃隊等と提携して事を挙ぐるの不可を諫争し且つ了叟等に謂て曰く、今や前將軍罪に伏し水戸に屏居し、其臣隷に諭して恭順を守らしめ、若し王師に抗すれば是我意に反し我命に背く者にして、刃を吾腹に刺すに同じく忠義却て不忠となるべしと云うに至る。然るに其臣下たる彰義隊遊撃隊等は其論命に従わず、前者は東叡山に拠りて王師に抗し一敗地に塗れ、後者は逃れて此地に來り狂猖を恣にす、これ独り朝廷の罪人のみならず又前將軍の罪人なり、而して君等この天地容れざる処の人と結托して以て無謀の挙を為さんとす、これ即ち甘んじて逆賊

となるなり、堂々たる提封十一万石の一諸侯たる我王家をして逆賊となし、以て区々たる亡命の徒と存亡を共にせしめんとするか、何ぞそれ念わざるの甚しきや無謀の挙を為すは大狂に非ざれば即ち至愚なり、且君等のたむ所は晒嶺の嶮なり、然れども嶮を恃みて敢を取りしは北条氏の覆轍以て段盤と為すべきなり、宣しく速かに驍然図を改め大義に依り名分を正しくし以て王事に勤むべし、是れ社稷万全の策なりと。了叟等固く前議を執り秀実の説を以て腐儒兵機を知らざるものとなして之を鄙く、其党も又之に和して秀実の説を駁し或は刀を拵じて脅迫する者あるに至る。秀実屈せず死を以て争い、諄々として大義名分を説きて已ます是より先き公は周回の事情に制せられ、止むを得ず姑らく意思を枉げて了叟等の為すに任せしも、心自ら安ぜず懊惱日を涉加して、今秀実の説を聞き空谷登音

M・R・Aアジアセンター見学記

あつい夏も去り今日は、めづらしくドンヨリと曇った初秋の日よりである。私共小田原史談会がM・R・Aアジアセンターを見学する会を催して郷土文化館前の広場に集合したのは九月二十五日午後一時二十分であつた。人員五十名として直ちに副会長をはじめ役員達を先頭に、天神山へと向う。そしてアジアセンターの事務所(元開院宮御邸)の玄関のベルを押すと外人が出たので、我々の来意をつけると「どうぞあちらへ」と庭園の入口の方向を指さし

て英語で言うのであつた。これは前以って係の甲斐さんに連絡してあつたので事務局としては私共の来るのを待っていたのだらう。一同が芝生の庭に集まると甲斐氏が出て来られたので皆あいさつした。既にセンターの模型も庭に出されて用意してあつて説明を受ける。即ち地上四階地下二階二千二百坪の建坪にして総工費五億円、そして落成は十月二十一日の世界大会に間に合す可く日夜二百人の職人を動員して突貫工事をして居るのだと言うのであ

を開くの思を為し、轉然として悟る所あり、其大に吾意を得たるを喜ばれ、直ちに之を嘉納し、了叟等の議を排し速に反心帰順し、遊撃隊を討動て王の事績を挙ぐる事に決し、一藩に宣諭し士民をして其向う所を知らしめ、各所の出兵を召還し郭内に屯集して後命を俟たしめ、公は一時賊に覺せし罪を引きて城中に謹慎せられたり云々」

以上の如く記されている

る。大体の説明を受けて工事中である裏側の現場へと案内さる。行く先き先きでの仕事をして居る方々に対しては非常に御邪魔になつた事と思うと改めて感謝しなければならぬ。切て屋上に昇つて見渡せばこれは又実に壯観にして美しく、我が小田原の市街を眼下に見下ろしそのさし高層と誇つていた天主閣も赤子の如く、そして遠く曾我山の山々も、波打ちよせる海岸線も一枚の芸術画の様で我々一同は其の天然の美のみごとさに驚歎するのであつた見学は約五十分を費して再び最初の芝生の庭に戻つた

そして冷い飲物の接待をうけた後縁側から十畳の日本座敷へと案内さる。ここは元開院若宮様御夫妻が日常御使用の部屋です一同に座布団が出され、又熱い御茶を頂く、しばらく待った程に外人(女園)に出迎してくれた人)の若者と通訳の中年の中本婦人、それに前川氏と言う、元教員でMRAの協力者が入って来られてそれそれ自分自身の生立ちやらMRAの精神道徳等又創設者の米国人であるフランクブックマン博士に関する

随筆あれこれ

会社乗取り騒動の巻(四)

井上生

る講義が約一時間程であった。次いで「アフリカ」と題するカラフィルムトキーが上映されて世界人類の発祥の地とされて居る未開の国アフリカ地方に於けるMRAの活動状況が次から次へと画面に写し出されるのであった。此の間四十分我々は物もつらしい事ばかりなので拝観したのでした。帰るに及び各々MRA雑誌を頂戴し又希望者には「フランクマンの秘訳」の書籍を分与してもらった。いろいろと御厚意の接待をして頂

編集部

その様にして十分間の会見はOKを頂いたのであった。処で私が森先生に御願いますのが最も適当と考へた理由は外にあっての事である。それはホテル創立の大立役者の一人に益田孝男爵がある。この方と森さんとの関係は実の親子の間柄であるのを当方ではチャンと計算に入れていたのです。扱て

る講義が約一時間程であった。次いで「アフリカ」と題するカラフィルムトキーが上映されて世界人類の発祥の地とされて居る未開の国アフリカ地方に於けるMRAの活動状況が次から次へと画面に写し出されるのであった。此の間四十分我々は物もつらしい事ばかりなので拝観したのでした。帰るに及び各々MRA雑誌を頂戴し又希望者には「フランクマンの秘訳」の書籍を分与してもらった。いろいろと御厚意の接待をして頂

り今日と言う事になった。私も少ないながらも廿五株の株主なので当然出席は出来る会社からは犬丸支配人それに小河原庶務課長と私の三人が出席した。

いた事に対して厚く御礼を述べて一同帰路につく。時計は四時半を示していた。御座るMRAに御譲りされた開院春仁様は御星敷を直ぐ隣りに御新築なされたので敬意を表す可く御伺いする事となった。丁度好都合に御在邸であったので我々一同は親しく御目に掛る事が出来たことは光栄でした。そして今日の一日はほんとうに有意義に過ぎせて頂いた事を皆様と共に感謝して止みません。

報徳祭に参じて

清水専吉郎

今日の問題の人馬越氏の姿がない大会社社長は直ちに開会を宣告しました。そしてスラスタと予定のコースで運ばれて行く、小林常務関根常任其の他欠員の重役の補充は全部大倉系から出す支配人は其のままと言ふ次第で拍手の内に総会は幕を閉じるとなりました。実にあつたこととは光栄で思ふ様な結果になつたのは何と言つてもあの政治力の有る熱の人森先生の御蔭と申さねばなりません。室を出て廊下の階段に行くときしも附添人の肩を借りながらトボトボと昇つて来られる馬越重役とパツタリ出合つたのであった「ああ遅かった」と私は心に思いながらこれも予定の行動かな?

(続く)

報徳祭の前夜九月十九日夕方より相山なる報徳記念会館に小田原史談会員及び地区の方々参集。文学博士佐々井信太郎先生の二宮

でした。尊徳先生の遺稿入の木箱三十余個八屯もありしと、之を報徳全集として三十五巻に編輯せられしその精隨を今晚ここに御話下されました。何とも有高い事です。御仕法より報徳の根元と天保年間心労の有様や実践せられた桜町建直の更生、水火過欠転災為福のお話を興味深く其先を期待し乍ら聴き入りました。現在及将来に適合するような労資協調の経済政策を既に実施せられ、今日に應用したき数々あり、之に報恩が加わりますので將に理想のものです。又不動尊に参籠せられし後の報徳の哲理までも説かれ我等も一円融合を切望するようになりました。全く有益な講演で直ちに役立ち活用する事が出来ます。

二宮、松風の謡曲ありて寝に就く

月明りかと同宿の方々起きいでて夜明けなり東海俊美氏、勝野憲一氏、内田武雄氏、清水印刷氏、後藤淺義氏と筆者の私と皆々史談に話ははづみ、早川莊の昔より、しづの小田原の名の起原、さては石器繩紋弥生の

大昔に遡り、内田氏の博識に古陶工の解明、地名の創始、小田原の旧諸小路旧町字名、酒匂川、早川の橋銭の事より旧橋諸々の存続、町家の興亡、宿場、本陣、御宿、旧在任奇人の佛、伝馬やおふれ書、閑所手形や古文水帖、さては小田原評定久野寄合が幻庵跡に及び時代を往きつ戻りつ珍らしい裡実に朝食を促がさるまで語り合いました。

復元されし二宮先生の生家に香月庵の点茶の接待を受け、その記念の名簿に、あめつちのめぐみをうけて今日ここに、尊徳翁をしのぶうれしさ、と冒頭に即詠をしるし、抵茶に潤いを寛二、二宮先生の偉徳を讃えあいました。

二十日午前十時、善栄寺に桜井地区と市教育委員会共催の第七回報徳祭が行なわれ、説経、真参、や尊徳薪像を東京テレビが取材してました。御詠歌に、色もなく香もなくつねにあめつち、と和讃講の合誦あり住職はその徳を經中に唱え教育委員長はその行を礼讃し、列衆と合掌しあいました。

怪異綺談

門松利平

私が十二、三才の頃だから今から五十年位前の話、その頃は飯泉観音の堂守として二王門前に六十才程の老夫婦が住んでいて、本名は誰も云わず堂久さんで通っていた。

土地の者ではなく堂久坊として観音様へ仕える俗僧だったろう。もともとこの観音堂には弥勒院、常福院、宏福院、宝珠院、勝地院の五院に大徳坊、堂久坊の二坊があり、合寺して勝地院だけが残り、寺名も改めて勝福寺となって現在に至ったもので、他の院坊の建物は全部取壊わされてその墓だけが面影を憶ばせているに過ぎない。

その堂久さんが老妻も死に、坊舎も腐朽したので観音堂の一間に起居して食事には勝福寺でする様になってからの話、観音金堂の西側にあった大日堂、この建物も大正十二年九月一日の関東大地震で倒壊未だに再建出来ないが古色蒼然全く文化財ものだった。

堂久爺さん時々農家へ夜話に出かけて十一時頃帰るのが例だった。早く堂間へ入って寂しい寝床へと本堂拜殿まで来てと正面階段が無い。はてな、此の辺りが確かに上り口だが？と考えた時にはもう遅い。今の者に想像も及ばない話だが、既に堂久さんは完全に化かされているのだ。右かな？左かな？と迷えば迷う程階段は見付からない。これから堂外巡りが始まるのだ。

いつでも二時間位はしてやられるのだから少なくも五六十回は右に左に巡らされるだろう。年は老っているし足は棒の様、愈々歩けなくなつて坐り込んで仕舞う。そこで漸やく気がつくのだぞうだ。時には東の空が白らみかける事もあるというから大変な化かされ方もあるものだ。

度重なれば愚痴話も仕なくなるもの、これが村の話題になった。化け物の正体確めんと血気の若い衆繰出の探索を始めたが判らな

い。堂久爺さんの嘘話とさまりかけた。当時の若者は秋ともなれば糶摺りは自家自製具だから親の米を盗み出して売り飛ばしては小田原遊廓へ女郎買いに行ったもの、一円あれば一晩遊べたのだから嘘の様な話。

この遊蕩青年も夜中すぎれば家の敷居は誠に高く、壊れかかった入扉も鉄壁に思えたのだらう。同行四、五人、この大日堂の中へ潜り込んで仮睡すること屢々だった。

時は晩秋、外観音境内は墨を流した様な暗黒、おまけに秋雨降りそほつてお詠え向きの舞台装置となる。と、この大日堂に覆い冠さる様に南側にある大銀材の天辺から、まるで大樹が引っ裂かれた様な音がしたかと思ふ間に、ミンミンずしんと堂をも揺るがすばかりの響がして堂内の彼等も一とかたまりに抱き合ったそ

うだ。夜明け近く堂から出て見ると銀杏の大枝が根元から折れて落ちている。それから大日堂の仮宿利用はパツタリしなくなつたが、風もないのにあの周りに三尺もある生ま枝が、どうして引き裂かれたかの噂は当分村中を賑わした。とうとうこれ関本の道了尊の天狗が夜遊びに來ての悪戯だらう、と云ふ事にけりがついた。

この大日堂が震災で倒壊して取払いになった時、もう堂久さんはとうに死んでいたが、床下に山の様に絡めた糞が幾つもあつた。さては堂久爺さん、すぐ傍の大日堂下の古糸にしてやられたのだな、と漸く嘘でなかつた事を納得した訳。

貉と之えば雨のそほ降る秋から冬にかけての観音境内には、ともすると狐の向うを張つてか、提燈行列を見せたものだ。これは大徳坊狐だという人もあつたが後から消えて前へ点いて行く狐の嫁入り提燈は面白い見物だったぞうだ。

この薬師堂にも怪異談がある。薬師堂から四五分て歸りつく所に通称屋号舖屋という農家がある。弥々さんといつてもう五十近かつたが中々のしつかり者だし頭も使えて区長まで勤めた位の人望家、この弥々さんがこれも村中へ用達しの歸り道薬師堂前の曲り終つた刹那後頭部の直上で突然一声、「飲むぞっ」の大音声、驚ろいたのなんの、履いた草履を脱ぎ棄てて後を見ず

に一目散、家の中へ泥足のまゝ飛び込み、呆気にと取られた家族に口もきかず、真青な顔色で床にもぐり込んで、とうとう二、三日起きることが出来なかつた。考えて見れば飯泉も、今日こそテレビ、冷蔵庫、洗濯器、自家水道、掃除器が競争の様に普及され、リヤカーは四輪車に、自転車はオートバイに、遂に小型ながら自家用自動車も四五台を数え、電化生活欧歌時代を現出したが、三十年前には狐、貉に化かされていたのだ。村も変わったが、狐、貉も今どこに棲んでいることか。思い出して懐しい

怪異綺談だ。報徳祭 広沢十五夜 まどいの灯報徳祭の夜の秋月代の精舎に集う報徳祭 走り穂のさやかにゆらく報徳祭 虫すだく報徳祭の月澄める

お知らせ 本会は十一月の市の文化祭の参加行事として左の三種目いたします。 十一月一日〜同七日 場所……郷土文化館 各派琵琶大会 十一月五日午後一時〜六時、場所……市民会館 十一月六日午前十時〜後五時、場所……市民会館 右は何れも入場無料でありますので皆様誘い合せの上御出かけ下さい。

第十五号 昭和三十七年十月十五日発行 (毎月一回発行) 会費 一ヶ年三百六十円 発行人 小田原史談会 編集人 機岡紙編集部 発行所 小田原市幸二丁目 郷土文化館内 小田原史談会 印刷所 清水印刷株式会社

お知らせ 本会は十一月の市の文化祭の参加行事として左の三種目いたします。 十一月一日〜同七日 場所……郷土文化館 各派琵琶大会 十一月五日午後一時〜六時、場所……市民会館 十一月六日午前十時〜後五時、場所……市民会館 右は何れも入場無料でありますので皆様誘い合せの上御出かけ下さい。